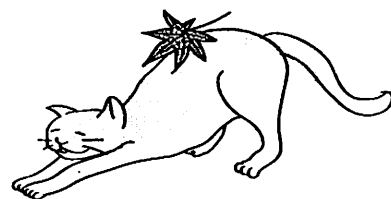


北海道の労働と福祉を考える会 会報



# ともに生きる



2013年10月28日発行（第28号）

## —2013 年度 夏季野宿者人数調査についての報告—

報告者: 上田文和

労福会では、毎年夏と冬に札幌市内の野宿者人数調査を行っています。1999年の発足以来綿々と続いてきたこの調査も、今回の夏季人数調査をもって、29回目となりました。継続的な調査によって得られた結果は、札幌市におけるホームレス問題を考える上で大変有用な資料となります。さて、今回の調査は8月25日に行われました。天候は雨模様、集合は午前3時という過酷な条件の中でも、28人の方が協力して下さいました。中には、労福会の活動に初めて参加する、という方も多くいらっしゃいました。調査に協力して下さいた皆様、そして朝早くからビルを開け集合場所を提供して下さった、なんもさサポートさんに、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。今回の調査について簡単に報告いたします。10チームに分かれ、自動車や自転車も用いて札幌市全域にわたる広範な地域の調査を行いました。調査は午前3時半に始まり、6時半頃に全チームが集合場所に戻ってきました。

結果は、男性30名、女性2名、不明14名の計46名となりました。去年の夏季調査では、84名という結果だったので、半数近く減少したことになります。分布的にも、去年は札幌市全域でカウントされていましたが、今回は札幌駅や大通りなどの中心部がほとんどで、その他の地域では、あまりカウントされませんでした。この減少はどのようにとらえれば良いのでしょうか。可能性としては二つ。実際に減少したか、それとも数え漏らしが存在するかです。前者の影響も確かに存在すると思います。他のホームレス支援団体様の活動もよく耳にしますし、労福会でも、生活保護申請の同伴などを行って、脱路上のお手伝いをしています。また、札幌を出て、他の場所に移動した、という可能性も全く0ではないと思います。

ですが、後者の影響、数え漏らしがあるという可能性も十分にあります。夜回りで野宿者の方に結果を報告すると、「そんな少ないはずがない」というリアクションをもらいます。ずっと同じ人が同じ場所にいる、という訳でもないのに、調査コースの見直しも視野に入れなければなりません。また、昨年まで24時間営業だったのに、今回行ったら24時間営業ではなくなっていた店舗や、深夜はトイレや座席を使用できないようにしている施設、長時間の滞在を禁止している施設などが多く報告されました。昨年までは野宿者がカウントされていた施設でも、このような報告がなされたので、追い出されてしまった野宿者の方はいらっしゃるか、その方々はどこに行ったのか、考えると暗い気持ちになります。調査結果については、これからさらに考察していきたいと思っています。

## ～札幌市（保護指導課）との関係をめぐって（前篇）～

今年度は10年間続いてきた札幌市との共催の炊き出し・健康相談会が行われなかった年となりましたが、それまでのいきさつを振り返ってみました（山内太郎）

過去の総会資料を見てみると、最初に札幌市と共催で炊き出し・健康相談会を開催したのは今からちょうど10年前の2003年10月19日でした。当時は行政と頻繁に打ち合わせの機会等を持ち、労福会の意見をかなり反映させた内容だったようです。当日には121名が参加して、うち39名の方が検診を受け、40名前後の方から法律や就労などの各種相談があり、20名弱の生活保護申請の同伴がなされたと記されています。また、行政を巻き込んで支援活動ができたことやそれがマスコミに報道され、活動のアピールもできたことなどがその成果として挙げられていました。

それから10年間、労福会では毎年5月、6月、9月、10月の計4回、札幌市との共催で炊き出し・総合相談会を実施してきました。この企画は労福会と札幌市だけでなくNPO法人ハンドインハンドさんとの三者の共催でしたが、2006年くらいから役割分担が明確になってきました。すなわち札幌市が相談会の準備（専門スタッフの手配）、ハンドインハンドさんが食事と衣料の提供、労福会が炊き出しの実働部隊といった具合です。このことによって企画の段取り等が飛躍的にスムーズになりました。頻繁な打ち合わせがなくても、あるいは初参加者が多くなっても、かたちとしては対応できる仕組みが確立したわけです。

しかし「仕組みの確立」は「作業のルーチン化」となってしまうやすいものでもありました。その後6年間、形式がほとんど変わらないまま企画が運営されることとなります。その結果、いつしか年度初めに札幌市保護指導課からその年の相談会の日程が告知される以外は特に打ち合わせもなくなり、三者の関係は当日に顔を合わせる程度の非常に希薄なものとなりました。さらに、その間に毎週炊き出しを行う支援団体や、緊急シェルターの機能を持った支援団体が登場するなど、

札幌市における路上生活者（およびその支援）の状況はどんどん変化していくのですが、これに対して現行の炊き出し・健康相談会は具体的な対応をほとんど取ることができていなかったと言えます。その結果、企画の内容が当事者のニーズと合わなくなってきたのか、検診を受ける人や各種相談を受ける方は年間でも5名に届かない状況となりました。また、札幌市の企画の捉え方も担当者が替わる度に微妙に変化しており、炊き出しと健康相談会は別物であるという、当初の共催の意義とは違った認識を示すようになります（企画中に出たゴミの処理や散髪企画の扱いなど）。

こうした状況は数年前から労福会内部でも問題として認識され、札幌市との共催のあり方について再検討した方が良いという声は出ていました。しかし行政とのパートナーシップを労福会の強みとして保持しておいた方がよいという意見もあり、なかなか具体的な動きにまでつながりませんでした。しかし、10年目の節目である昨年にハンドインハンドさんがこの企画から撤退するとの申し出により、状況が大きく変わることになります。詳しくは前号（会報第27号）でもお知らせしていますが、結果として食費や衣料費など労福会が負担する費用が大きくなり、それが会の財政を圧迫するようになってきたのです。いわばこれまでのルーチンを放置してきたツケが回ってきたわけですが、とにかく状況を打開しなければなりません。ここにきてようやく労福会の活動における炊き出しの位置づけや札幌市との関係のあり方について議論がされるようになりました。その結果「炊き出し・健康相談会はこれまでのやり方から大きく変えていかなければ、労福会としても札幌市と共催でやっていくことは難しい」という方針で札幌市との話し合いをしていくことになりました（続く）

## ～僕らを 歩きながら～

「過去に労福会の活動を担った方たちに、当時の様子や思い出を語ってもらおう！」というコーナー。今回は、OBの人見さんに、当時の労福会の活動を振り返ってもらいました。

### 「労福会での活動を振り返る」

名古屋学院大学 人見泰弘



先日「労福会のOBなので、何か一言メッセージを書いてください」という何ともアバウトな依頼を受けてしまい、必死に記憶をたどりながら、この文章を書いています。

いま私は、札幌での学生生活を経て、名古屋市内の大学で教鞭をとっています。もともと、労福会が始まるきっかけにもなった椎名ゼミの一期生でした。椎名ゼミは季節労働者や求職者などに聞き取りをするようなゼミだったので、その流れで、当時まだ札幌駅のガード下にあったテント村まで出かけて、路上生活中のおじさんに話を聞きました。その聞き取りから半年ほど経ったころ、今度は炊き出しをしようということになり、労福会の立ち上げにつながっていきました。よく考えると、もう15年も前の話ですね。こんど代表になられた山内太郎さんが、そのころは卒論に追われる大学四年生でしたし、太郎さんと初めて一緒に夜回りに行った帰りに、さっそく飲みみに連れていかれたことをよく覚えています。労福会で言えば、ひとつの通過儀礼(?)ですよね。労福会は最初から「飲みニケーション」でしたし、学生だけではなく、大学院生や教員、社会人などが混じていたので、教室では聞けないような話もよくされました。ふつうの学生サークルにはないよさでしたね。

労福会でのことをふりかえると、楽しいこともありましたが、どちらかというと「しんどい」ことの方がよく覚えています。私は買出しや荷物の運搬など裏方的な仕事をするが多かったの

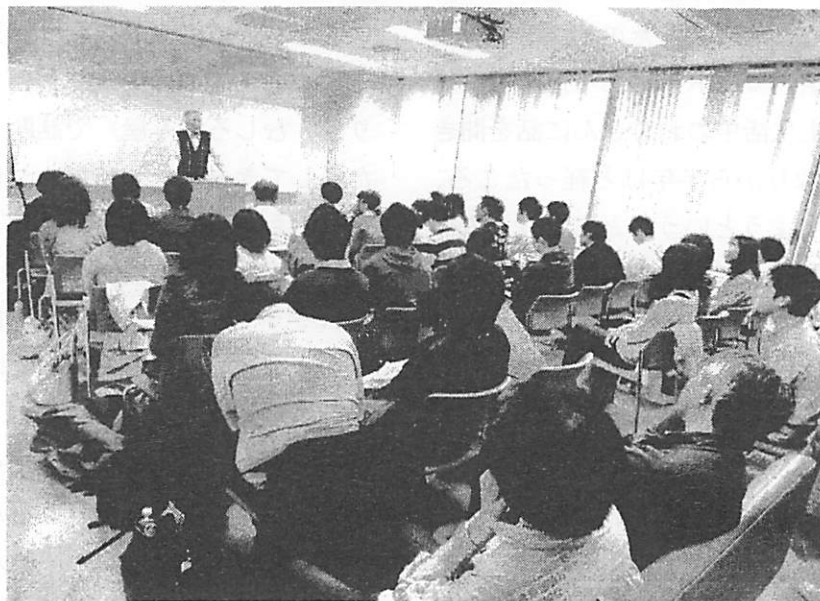
ですが、炊き出しの他に市役所への生活保護申請に付き添うこともありました。労福会が活動した当初は、なかなか生活保護が受けられず、むしろ、受けられる方が稀でした。何の成果もないまま、おじさんと一緒に市役所から帰ってきたことも何度かあります。そのままテント村へと帰っていくおじさんに、何と声をかけたらいいのか。ただ黙って二人で歩いて帰ってきたときは、ほんとうに切なかったですね。とはいえ、そういう経験を一人で抱えるのは大変でしたし、会議(というよりも、むしろ飲み屋)で話題とし、みんなで考えたりしてきました。私たちの世代は学生が多かったこともあり、会議や炊き出しの後では、「自立/自律」とか「支援」とか、よく話題になりました(そうでないときは恋バナばかり)。

いま考えてみると、労福会は不思議なところだった気がします。ここに関わらなければ、たぶん普通に就職して、いまとは全く違った仕事をしていました。それくらい、いろんな人と出会うことができる場所でしたし、いろんなことを考える機会にもなりました。そして、なによりも、15年前に始まった活動が、何度か途切れそうになりつつも、いままで続いてきたのは、現在の学生・社会人の方々を含めてたくさんの人たちのおかげです。卒業後も連絡を取り合うOBたちも、「労福会はまだあるのか？」と気にしています。労福会では「しんどい」経験をすることもあります。ぜひこの貴重な場所を次につなげていってほしいですね。

## 「元ホームレスの話を聞く会」振り返り

報告者：下郷沙季

5月18日に「元ホームレスの話を聞く会」と題して、北海道大学で広岡繁さんによる講演会を行いました。広岡さんは、約12年の路上生活を経て、昨年10月よりアパートに入居、現在は年金生活を送っている方で、今回は労福の新しい試みのために一肌脱いでくださいました。当日は50名近い方が来られたため、会場が満員になり、さらに椅子を運び込まなければならぬほど大盛況のうちに終了しました。今でも交流が続いている学生時代の友人たちとの思い出や、エルムトンネルの設計を請け負った話、また家族との別れなど、「ホームレスってこんな人」ではなく、広岡さんという一人の人間の、人生の一ページとしての路上生活について語っていただくことで、ホームレスに対するイメージや偏見が来場された方たちの中でぐらりと揺らぐ機会となったのではないのでしょうか。中にはシビアな話題もありましたが、広岡さんの気さくな人柄もあって笑いを挟みながら会は進み、とても和やかでわくわくする時間となりました。普段、当事者や元当事者の方と話すことはあるものの、なかなかじっくりとお話を伺うチャンスがない会員にとっても、大変貴重な経験になったと思います。これからもこういった講演会をオムニバス形式で続けていくことで、ホームレスに至るまでの多様な背景について考え、「悲惨」だの「怠惰」だのといった一元的なイメージからの脱却の機会としたいと思いますが、まあなかなか後継者がいないですね・・・。



最後に、今回の講演会の反省会にて、会員間で話し合ったある問題について、ここで紹介したいと思います。それは、来場者の一部から、講演会のタイトルについて「ホームレスという言葉は状態であって人間に使うものではない」という批判が出たことがきっかけとなったものです。会員からは「homelessは形容詞かもしれないが、日本語においてホームレスはもはや名詞だから問題ない」「そもそもホームレスという言葉自体、使うと差別意識が働くものだから避けるべきではないか」「いや、ホームレスの人に対する偏見を払拭させようとする講演会なのだからこのタイトルでもいいのではないか」「実際に日々当事者と接している我々がホームレスという言葉を使うことをタブーにしてはいけない」など、様々な意見が出ました。みなさんはどう思われますか

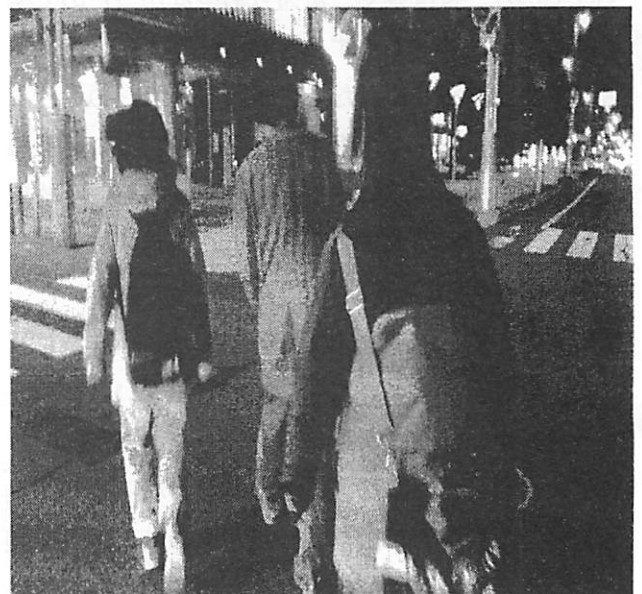
■上半期の夜回りの報告（第四土曜を除く、毎週土曜日 19:00～21:00）

札幌駅・エルプラザ	平均 8 人 (男性: 8 人、女性: 0 人)
大通り・地下歩行空間	平均 10 人 (男性: 9 人、女性: 1 人)
狸小路・スキ・WINS	平均 6 人 (男性: 6 人、女性: 0 人)
創成川・桑園ジャスコ	平均 3 人 (男性: 3 人、女性: 0 人)

## ～夜回りに参加してみて～

はじめまして。今年の6月頃から労福会の活動に参加している大家と申します。現在、大学2年生で、社会福祉学部に所属しています。以前より、貧困問題や路上生活者の現状に関心があり、「ホームレスの方と関わりたい」との思いから、労福会の活動に参加するようになりました。活動に参加する前はホームレスの現状について、どこか遠い地域でのことのように捉えていたのですが、活動に参加するようになってからは、自分が住む札幌で多くのホームレスが暮らしていることに改めて気づかされ、様々な思いを抱えながら生活していることを知り、自分の身近なこととして考えるようになりました。ホームレスの方と関わる中で支援をしているというよりも逆にホームレスの方から教えられることや、励まされることがあり、活動を通して学ぶことの多さを感じています。活動に参加し始めてから日が浅いため、ホームレスの方の思いが十分に聞き出せなかったり、声掛けにとまどってしまったりなど、不慣れな点が多く、他の会員の方に迷惑をかけてしまっているかもしれません。至らない点も多いかと思いますが、よろしくお願い致します。(大家佳子)

はじめまして。ビッグイシューから労福会の活動に参加させてもらっている柏谷美沙と申します。精神保健福祉士を目指して札幌診療福祉専門学校へ通っています。ビッグイシューのスタッフさんから夜回りに参加したお話を聞いて関心を持ち、夜回りに参加しました。夜回りに参加して、実際に路上生活をしている方と交流することで、学校では学べなかった、路上生活者の現実を目にすることができ、とても良い経験になっています。労福会の皆さんとお話をする時間も、私が知らなかったたくさんの情報を知ることができ、毎週会える日をとても楽しみに思っています。今後も夜回りに参加し、皆さんと一緒に労福会の活動に取り組んでいきたいです。(柏谷美沙)





## タカダコウタロウの 「もうどっか行くしかない！」

ヒッチハイクで旅をするのが好きだった。それもやるなら夜がいい。

夜のヒッチハイクは印象深い思い出ばかりだ。(高田晃太郎)

### 第五回「夜、国道に立つ。」

ヒッチハイクするなら夜がいい。昼と夜では乗せてくれる層が明らかに違う。ぼくは童顔なので、顔の見える昼間は「お情け」で車が止まってくれることが多い。「中学生だと思った」「困ってそうな顔をしていたからつい止まってしまった」。乗って早々、こんなことをよく言われる。でも、夜は事情が少し違うのだ。

暗闇の中、ぼくは国道に立つ。車がすれ違うとき、一瞬ライトで照らされる。車からはぼくの顔はよく見えない。年も分からないだろう。これではドライバーも止まりづらい。ヒッチハイクしていることすら気付かずに通り過ぎていくドライバーもいるだろう。たとえ気付いたとしても、顔も見えない何者かが真夜中にヒッチハイクしていて、乗せようとは普通は思わないだろう。にも関わらず、”待ち続けていれば”必ず誰かがとまってくれる。夜に拾ってもらった出来事は思い出深いものが多い。

大学1年の夏休み。北海道をヒッチハイクで回った。夜中、小樽の近くで「留萌」と書いたボードを掲げていた。夜は遅く、車通りも少なかったので半ば諦めていた。でも、ずっと立ち続けていると、1台の車が止まってくれた。止まってくれたのは仕事帰りのサラリーマン。家では奥さんが待っているのだという。当初は隣町まで乗せてくれるという約束だったが、結局、留萌まで200km近くを走り抜けた。道中、奥さんから何度も電話がかかってきていた。留萌に着いて、2人で記念写真を撮った。「浮気じゃないって証明するためにも撮っておかないと」。と、サラリーマンは笑い、暗い道を帰っていった。

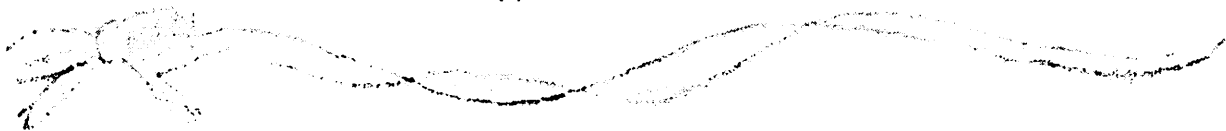
思い出すことはまだまだ沢山ある。パトカーに追われている最中の車に拾われたときのこと。風俗嬢に拾われ、何の用もないのにわざわざ帯広から釧路

まで乗せていってもらったときのこと。ヤンキーに拾われ、真夜中になぜか石狩の海まで連れていかれたときのこと。高速道路のSAで若者2人に拾われたものの、話があわず、大津～横浜間をほとんど無言で過ごしたときのこと。何だか悪い気がしたので、お土産として持っていたハツ橋をあげると、とても喜んでくれた。初めて年下に拾ってもらったときのこと。彼は中学を卒業してすぐ働き始めていた。なぜか分からないが、ぼくはそのとき自分は年下であると嘘をついた。彼には横浜から東京駅まで乗せてもらった。吹雪の中、中年の男に拾われ、なぜか一緒に青森のネットカフェで一夜を過ごした日のこと……。

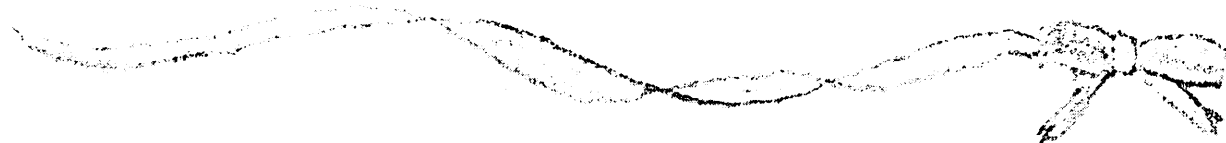
室蘭で過ごした夜も思い出深い。室蘭に行きたくて、夜、国道に立っていた。国道36号線。止まってくれたのはどこかの保険会社の派遣社員だった。会話は大きく盛り上がりなかった。それなのに、なぜか2人で室蘭焼き鳥を食べに行くことになった。店に入っても、会話は大きく弾まなかったように思う。ぼくは何だか悪い気がしたので、ここは割り勘を覚悟した。そろそろ店を出ようかというとき、ドライバーの男は「先に出ていろ」と言った。言われた通り、先に店を出て振り返ると、男が店主に頭を下げているのが見えた。「次の給料日には払うから」。そうお願いしていたのだろう。胸がきゅとなった。店を出たあとも、男とは2時間ほど一緒に過ごした。旧室蘭駅、測量山、白鳥大橋……。初めて訪れる室蘭の街を車で案内してもらったのだ。最後は室蘭の道の駅で別れた。

もう会うこともないであろう見知らぬ人と、夜、一緒に車に揺られながら言葉を交わした経験が僕の心の中で今でも深く息づいている。

## 新しい仲間が増えました！！



北星学園大学、福祉学部の実習生として、労福会の活動に参加させていただきました。野宿者の支援団体、というのは福祉学部生の選ぶ実習先としては珍しいものだったのかもしれませんが、大学内で学ぶことの出来ないことを実習で学ぶ、という目的からすると、札幌の野宿者の状況を知ったことは、確かに良い学びになったと思います。5日間活動に参加し、まず野宿者が自分の住んでいる、札幌という地に確かに存在している、ということを認識しました。実際に向き合った野宿者の方々は、今まで持っていた野宿者、ホームレスのイメージとは異なり、そこにいたとしても風景として見過ごしてしまっていたような、そんな方々でした。会話をしている、その印象は特に変わらず、ごく当たり前に、住居を持って生活している人と変わらない人々であったと思います。それでも、野宿者であることの卑下や自虐のような言動が、端々から見えるようなことはありました。労福会と野宿者とは支援者、被支援者の関係ではありますが、力を貸さなければ、助けなければならない存在として野宿者と関わっているのではない団体だと感じます。支援とともに寄り添う集団でもある、というアプローチの形と、野宿者が置かれている状況を、この後の学習でも生かすことができればと思います。(木村紅葉)



「北海道の労働と福祉を考える会」の印象は「実質的なホームレス支援団体」として、慈悲の心から支援活動しているだろうというものでした。しかし実際に人数調査や夜回りに参加してみると、少し違っていました。ホームレスの方々に会い労福会の方々の話を聞いていると、ホームレスの方よりも労福会の方々が却って暗く思い悩んでいるように感じました。結局当初考えていた印象とは逆に、労福会は「答えの未だ無い問題について思い悩む場」と考えるようになりました。ホームレスと社会の調和とはなんなのか、何が問題で何をどうするべきなのかを本気で考える場が労福会なのではないかと思っています。その答えが見つかることを期待しています。(小山田伸明)

**随時、新しい会員を募集しています！！**  
**一緒にスタッフとしてお手伝いいただける方は**  
**労福会のアドレス(info@roufuku.org)までご連絡下さい。お待ちしております！！**



## 新代表 山内太郎体制へ！！

9月22日に臨時総会が開催されました。役員人事の改正があり、新代表として、山内太郎さんが就任され、副代表は、楠高志さんが留任ということに決まりました。これからもよろしくお願いします！！

## インフォメーション

### ■夜回り

とき：第一・第二・第三土曜日

19:00～21:00

集合：エルプラザ二階のブース前  
次回は、10月5日です。

### ■炊き出し（予定）

とき：12月7日（土）

18:00～20:00頃

場所：札幌市民ホール（北1西1）

共催：司法書士会

### 労福会って？

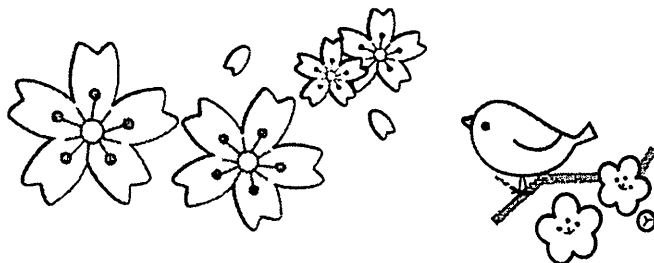
北大の教養科目「一般教育演習」で野宿者調査を行なったのをきっかけに、教育学部の教官や学生が中心となって1999年に発足した任意のホームレス支援団体です。現在は学生に加えて社会人も多く参加し、主な活動として夜回り、炊き出し、生活保護申請の同伴、人数調査、学習会などがあります。

## ご寄付をいただきました

北一条教会、廣瀬知弘、嶋田佳広、東由佳子、  
小林幸一、大下真利子（福岡）、石橋孝彦、  
木下武徳

（敬称略、2013年2月～2013年9月現在）

ありがとうございました！！



納入はもうお済ですか？

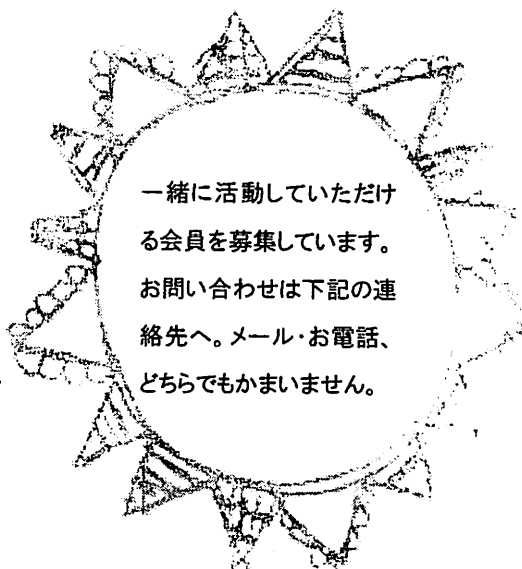
## ～会費納入のお願い～

会費は、私たちの活動を支える大事な財源です。  
早めの納入をよろしくお願いいたします。

《郵便振替口座》

郵便番号：02730-0-37163

講座名義：北海道の労働と福祉を考える会  
※2013年度の会費をまだ納入されていない方は、お急ぎお振り込みをよろしくお願いいたします。



一緒に活動していただける  
会員を募集しています。  
お問い合わせは下記の連絡  
先へ。メール・お電話、  
どちらでもかまいません。

「ともに生きる」28号 —2013年9月28日発行

北海道の労働と福祉を考える会

発行責任者 山内太郎

編集担当 山口大輔

住所 〒001-0008

北海道札幌市北区北8条西3丁目28番エルプラザ2階市民活動サポートセンターブース No.11

連絡先 （電話）090-7515-8393 （E-mail）info@roufuku.org （HP）http://roufuku.org